

佳作

## コロナに負けない人たち

長崎県 長崎市立小柳小学校四年 永松 葵

私は、夏休みにコロナという病気にかかりました。コロナにかかる前は、テレビを観ても「大変だな」くらいしか思っていなくてただ観ているだけでした。お母さんが仕事に行くのでおばあちゃんの家に行くことになっていつもどおりすごしていたら夕方から体がだるくなっていつまで三十八・五度ぐらいいまですって本当に体がつかったです。家に帰っても熱は下がらず次の日をむかえてコロナのけんさをしました。鼻の中に長いめんぼうをいれられたけんさが本当にいたくてびっくりしました。だけど、かんご師さんが「大丈夫?」「いたかったね」「よくがんばったね」と心配してたくさん声をかけてくれました。医療従事者の人たちが毎日毎日、忙しくてきつーと思うのにコロナにかかった私たちの事を第一に考えてくれてとてもうれしくてたまりませんでした。

病気を治してくれるだけではなく一人一人にやさしい言葉をかけていることにとても感動しました。医療従事者の人たちにもきつーと「大切な人」がいる。その人が、事故にあったり病気になったりしたらすぐにとんでいけるのかな?と心配になりました。それでも人の命と向きあって医療従事者の人たちには感しゃありません。でも、コロナという病気がなければ手洗いうがい消どくマスクなどのかんせん対策のこととあまり向きあえていなかったかもしれせん。「この病気がなくてなくなれ!」って思うけどもし本当になくなったら消どくなんてこまめにせず、みつのじょうたいでマスクもつけずに人とおしゃべりするなんてことをして、またふえていくかもしれない。だったら、コロナが○人になっても気持ちゆるがさずに手洗いうがい消どくマスクをすればいいんじゃないかなと思います。でも、やっぱりみんなと一しょにきょうりよくしてコロナ○人をめざしていけないとけないんじゃないかなと思います。だからみんなで手をとりあってきょうりよくしていけばぜったいにコロナ○人をたっせいすることができる!と私は思いました。けっしてかなわなくてもあきらめない心を

もっていこうと気づきました。

コロナとたたかっている人は今でも、たくさんいる。そしてそれを助けようとしている人たちだってたくさんいる。だから、その人たちに心から「ありがとう」と感しゃする。その気持ちだけでもおうえんになるしうれしい。だからこそ、みんなと手をとりあってコロナにも負けないような日本を作らないといけない。コロナで苦しい思いをするような人なんてもうみたくなんかから。少しでもみんなの役にたきたいなと思って困っている人がいたら「大丈夫?」と声をかけたらいいなあと思いました。だから、感しゃの心を未来へずつつないでいってほしいと思いました。